

供養遊山

吉岡 省二

近所の本屋に、追悼の意を込めてか、寂聴さんの著作が集められた一角があったのだが、先日覗いたらなくなっていた。小説に随筆、文庫本など、それぞれの場所に戻っただけでも言えるが、ご遷化来の歳月を実感する。

自分も含め人々の記憶から、少しずつ寂聴さんの思い出が薄れていくのだとしたら、とても心苦しい。「亡くなった人を忘れず、思い出すことが供養」と、寂聴さんはおっしゃっていたのに。そんな日々の中で、機会があれば……と、ずっとあたたためていた計画を思い出す。

師走の週末、東京へ戻る新幹線を京都で途中下車し、嵐山からさらに奥の「水尾の里」へ。寂聴さんの短編『吊橋

のある駅』や、全集に収められたご自身による解説を読み、いつの日にか訪ねてみたいと思っていたのだ。せっかく訪ねるなら柚子の季節と決めて。

水尾へのJ Rの最寄り駅、保津峡駅は橋の上。足が震えそうなのは、目がくらむようなその高さか、吹き上げる寒風のためか。それでも下の保津川（大堰川）から視線を上げれば、遅れていた紅葉をまだまだ楽しめる。電車を降りた人は多くはなかったが、鉄道愛好家と思われる数人が、駅名標やその先に広がる絶景を、思い思いにカメラに収めて楽しそう。

無人の改札を出て、ベンチで待つことしばし。ほどなくやってくる水尾へのマイクロバスに乗り合わせたのは、知人を訪ねるといふ老女が一人だけだった。

水尾に着き、集落の中を歩き始めても、人っ子一人出会わない。何年も休校中と思しき小学校は静まり返り、凜とした空気の中、二宮金次郎が一人。散り積もる枯葉の乾いた音まで聞こえそうな静寂。時が止まったようなこの隠れ里で、動くものといえば枯れかけの秋草、流れる雲くらいの侘しさ。それでも柚子の黄色が映える青空には、心が洗われるような恵沢がある。

桃源郷にも例えられるこんな場所を、時候にも恵まれて訪ねられたことは好運だった。散策を終えて、停留所でぼんやりと帰りのバスを待つうちに、短い夢は覚めてゆく。愛宕山へのハイキングから女性グループが下りてきて、その賑やかな会話は、道端に並ぶ自販機の柚子製品を、あれこれ品定めして楽しそう。

その後、食事に立ち寄った嵯峨嵐山駅近くのレストランBは、コンクリート打ちっぱなしのシックな佇まい。以前、テレビの旅番組で紹介されていて、寂聴さんも最層にされ

た店とのことだったので、京都への機会があればと楽しみにしていた。

先客の和やかな会話にあたためられた店内に残る席は、私の予約した一席のみとなっていた。ワインを飲みながら、鉄板上のシェフの手さばきなどを見ていたら、一人でも飽きず、スマホなどに頼ることもない。

阿波牛のフィレステーキのコースと薦められたワイン。どちらもとても美味しくて、満足感に浸っていると、マダムとシェフが声をかけてくださる。来店の動機などをお話ししたところ、シェフから、寂聴さんとの思い出話とともに、思いがけない言葉が。

「いまお掛けの席が、寂聴さんの指定席でした——。」

故人を思い出すことが供養。とは教わったものの、こんな物見遊山でも？と心許ない。それでも、神仏のすてきな計らいに、心まで満たされて、また新幹線に乗った。